



武内直亮
たけうち なおあき
株式会社ブレインマークスの代表取締役

大手のVS（コンビエンスストア）で、計費削減、経営改善、経営支援を目的、企業に「多面的な課題解決」に尽力し、多くの経験と実績を積み重ねた。人材育成を中心とした人事管理職の構築や経営を中心とした自主性を発揮する組織づくりを得意としている。幅広い経験と実績に裏打ちされたコンプライアンススタイルはクライアントから高い信頼を獲得している。

10年後のためのアドバイス

造園業界はニーズの減少と人材不足という二重苦にあります。そのようななか、スズランエクステリアが新しい仕組みを取り入れながら造園の枠を超え、成長しつづけているのは素晴らしいことです。その精神的なマインドこそが同社の最大の強みといえるでしょう。一方でガーデニング分野は伝統的な造園に比べるとリピート需要が少ないという特徴がありますが、同社はこの点について、顧客への情報発信を軸とする「継続戦略」をとっています。つまり、地域密着型で住宅まわりのリフォームやバーキングスペースの整備などにも仕事の幅を広げることで、伸びしろを確保しているのです。これも実際に売った数値といえるでしょう。今後はさらに多様化するニーズに対応するための人材の獲得・育成が課題になってくると思います。そのあたりも踏まえ、脳ブレインマークスは鈴木社長とともに、同社の強みをしっかりと保持しながら事業を継続・発展させるための戦略を打ち出し、運営しています。

※ランチェスター戦略——企業を顧客と国庫に分断し、それぞれにあった強い力で事業拡大を目指す戦略。とくに中小企業の成長のための戦略として広く知られている。

10分の1以下になっているように感じます。

武内 そのような環境があるなかで、どのような生き方を持ってきたのですか。

鈴木 創業時に思い描いた和風庭園をつくる庭師という意識から、製造市場であるエクステリア（住宅の駐車場、デッキ、ガートンルームなど）の参入をはじめました。

武内 なぜエクステリアに参入したのですか。

鈴木 一般家庭が和風の庭をつくらない時代になり、お隣の市場に残り出すしかなかったのです。それと最新のデザインのエクステリア、ガートンがキラキラと輝いて見えたんです。

武内 伝統的な造園とエクステリアでは、ノウハウ面での違いがあるのですか。

鈴木 和風の庭づくりでは職人

の技術やセンスが重視されるのが、エクステリアでは天然石やレンガなどリアルな工芸品を適切に組み合わせること、そしてハイセンスなデザインと造園造園の施工が求められます。

武内 今はエクステリアに留まらず、住まいのリフォームも手掛けていると聞きましたか。

鈴木 和風の庭づくりにはじまり、輸入された日本で増えた庭木の「コニファー」針葉樹で調音的な美観性を持ったもの一を売ったガートンに挑戦したり、住宅の外壁塗装やキッチン、お風呂のリフォーム、増築と、手掛ける



「新しい」を体現している造園の入口

範囲を広げていきました。

武内 集客・マーケティングに関してはどのような工夫をしていますか。

鈴木 第1はランチェスター戦略（※）にもとづき

「狭い範囲でナンバーワン」を目指すことです。つまり、地域内に集中的に顧客を増やし、地域内でよく名前を聞く会社になることで、異業感を演出しています。商品の細を止けた父、現場を徹底的に回り、自動車でも20分以内で行ける範囲でしか受注していません。

具体的な施策に関しては、いわゆる「ポイント商法」を重視しています。過去に施工した事例を徹底的に解説した写真集（「315ページ」をつくり、地域内の同業他社にはない、集客の集客ツールとして活用しています）。

また、過去に「種をいただいたお客様」に「ニュースマガジン（20ページ）」を年4回発行し、リピート受注と紹介につなげています。ニュースマガジンは最初の3年間はまったく反響がなかったのですが、

武内 今後の目標についてはどうですか。

鈴木 「地域の建設業の中で、一番人が集まる新しい店（アリア）を自給していきます。この地域でもっとも新しい会社になっていくために、多くの新しいイベントを開催して、安定的な経営基盤を構築しながらファンを増やしていきたいと考えています。

鈴木健治

すずき けんじ
株式会社スズランエクステリア代表取締役



1983年生まれ。静岡県掛川市出身。静岡県立静岡産業短期大学卒業。掛川市で造園業の職人修行。30年父とふたりで造園業を継承。2003年株式会社スズランエクステリア設立。09年株式会社ホームズ設立後、現在にいたる。

10年後をリードする 未来企業 127

「地域密着」を掲げ、時代に合わせた新しいガーデニングビジネスにチャレンジ!!

静岡県掛川市を拠点に造園や住宅リフォームを手掛ける南スズランエクステリア(鈴木健治社長)。造園業界が厳しい状況にあるなかでも時代に合わせて柔軟に変化し、地域で着実に成長を遂げている。さっそく、同社の創業の経緯や強みに、脳ブレインマークスの武内直亮氏がアプローチした。



いろいろな働くスタッフたち

は、父が造園に趣味を持っていただけです。私は高校、この業界に趣味を持っていませんでした。たが、とにかく「起業したい」という一心で仕事に打ち込み、ノウハウを身につけました。

ただ実際に1999年に起業